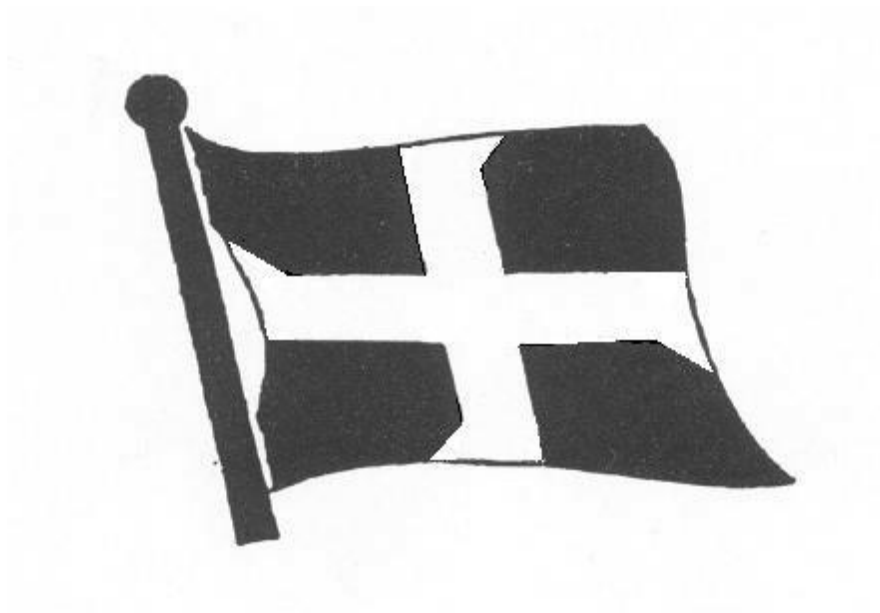


蒼穹 NEWS

No.4

七大戦総括号

令和6(2024)年8月3日発行



—目次—

- ①主将挨拶・女子主将挨拶・監督挨拶
- ②七大戦結果
- ③七大戦各競技総括
- ④その他ご報告

① 主将挨拶・女子主将挨拶・監督挨拶

《主将挨拶》

7月27日、28日に豊橋市陸上競技場にて、七大戦が行われました。男子は103.5点で総合優勝、女子は25点で総合準優勝という結果でした。

史上初となる男女総合優勝にはあと1点及びませんでした。それでも、チームの一人一人がこの目標に真剣に向き合い、絶対達成できるという自信を持ち、ここまで強くなる事ができました。悔いがないと言えば嘘になりますが、死力を尽くして戦ってくれたみんなに、そして支えてきてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいですし、チームで掴み取ったこの結果を誇らしく思います。

これから松井と平松を中心に、一時的に新たな幹部が引っ張るチームが指導します。彼ら彼女らになら、自分達がここまで作ってきた自慢のチームを、安心して託せます。

京都大学陸上競技部は、これからも強くなり続けます。そして、このチームに属する一人一人も、強くなり続けます。このチームで過ごす時間が、一人一人にとって大きな財産となるよう、部員一同今後とも精進して参ります。

最後になりましたが、蒼穹会の皆様におかれましては、稀に見る猛暑の中、暑いご声援を賜り、本当にありがとうございました。今後とも変わらぬご支援・ご声援の程を何卒よろしくお願い申し上げます。

京都大学陸上競技部主将 中川 遥仁

《女子主将挨拶》

チームで掲げてきた史上初の男女総合優勝という目標を今年の七大戦で叶えることはできませんでした。

一方で、優勝することしか想像できないほど強いチームになったこと、そして男子は圧倒的な差をつけて優勝し、女子も途中大きくリードされながらも最終種目まで繋げたこともまた事実です。

2日間の中で、過去の七大戦で得た憧れや悔しさを駆動力にした姿が多く見られました。この七大戦も今年だけのもので終わらせるのではなく、これからの京大陸上部の歩みに組み込めるよう努めてまいります。

最後になりますが、猛暑の中遠方での開催であったにも関わらず多くの蒼穹会の皆様に現地で応援していただき、誠にありがとうございました。今後とも変わらぬご声援のほどよろしくお願いいたします。

京都大学陸上競技部女子主将 平岡 雪乃

《監督挨拶》

七大戦が終了しました。結果としては男子が103.5点で優勝、女子が25点で準優勝となりましたが、男女総合優勝の目標に対し、女子が1点の差で優勝を逃し、目標達成とはなりませんでした。

男子では、短距離においては100m, 200m, 400mのいずれも優勝し、そのまま両リレーでも優勝するなど、圧倒的な力を見せました。また、史上最高レベルとなった中距離では杉原(3)が4位となりました。競歩陣も1, 2, 5位と三人入賞し、男子の優勝を決定づけました。フィールドでは主将中川の意地の4位入賞をはじめ、世代交代した選手たちが躍動しました。

女子では篠田が大会新の砲丸、やりの二冠で最優秀選手を獲得、新保(4)が多種目出場の中で100mHで自己ベストを出すなど奮闘、小倉(3)がランキングを返すなど、事前ランキングトップながらさらに点を上積みしましたが、さらに点を重ねた大阪大学に最終種目の4継で及ばず、優勝を逃しました。

この1点の重みと悔しさを忘れず、チームに何が足りないのか、どのような取り組みを行っていくべきか、チーム全体として振り返り、来年に向けてまた部員一同歩んでいきます。

蒼穹会の皆様におかれましては、酷暑の中ご声援いただき、ありがとうございました。また、速報、ライブ配信にて応援いただいた皆様にも感謝申し上げます。またさらなる鍛錬と研鑽を積み、東大戦での男女総合優勝に向け準備して参ります。今後とも変わらぬご支援・ご声援を何卒よろしくお願い申し上げます。

京都大学陸上競技部監督 島村 夏惟

② 七大戦結果

〈男子総合〉

順位	大学	総合得点
1	京都大学	103.5
2	東北大学	89
3	大阪大学	71
4	東京大学	60
5	九州大学	39
6	名古屋大学	35.5
7	北海道大学	22

〈女子総合〉

順位	大学	総合得点
1	大阪大学	26
2	京都大学	25
3	東北大学	17
4	北海道大学	17
5	名古屋大学	13
6	九州大学	2

〈男子トラック〉

種目	京都大学	大阪大学	東京大学	東北大学	九州大学	名古屋大学	北海道大学
4×100mR	6		3	2	4	5	1
4×400mR	6	5	3	4	2		1
100m	9	7			5		
200m	11	7			3		
400m	11	2	3		1		4
800m	3	11		6	1		
1500m		5	10		3	3	
110mH	2			10	5	1	3
400mH	8			8	4	1	
3000mSC			10	3	1	7	
5000mW	13	8					
5000m			12	1		8	
トラック合計	69	45	41	34	29	25	9

〈男子フィールド〉

種目	東北大学	京都大学	大阪大学	東京大学	北海道大学	名古屋大学	九州大学
走高跳		9.5		3	5	3.5	
棒高跳	7	9	5				
走幅跳	13	4	3				1
三段跳	2	8	7			4	
砲丸投	6		5	6	4		
円盤投	4	2	5	1		3	6
ハンマー投	10	2		9			
やり投	13		1		4		3
フィールド合計	55	34.5	26	19	13	10.5	10

〈女子トラック〉

種目	大阪大学	京都大学	東北大学	名古屋大学	北海道大学	九州大学
4×100mR	4	3	2	1		
100m	5	2	3			
400m	3		6			1
800m		3	4	1	2	
3000m	5	2			3	
100mH		6		4		
トラック合計	17	16	15	6	5	1

〈女子フィールド〉

種目	北海道大学	京都大学	大阪大学	名古屋大学	東北大学	九州大学
走高跳	3		2	4		1
走幅跳	4	1	5			
砲丸投	3	4	1		2	
やり投	2	4	1	3		
フィールド合計	12	9	9	7	2	1

③ 七大戦各競技総括

第75回 全国七大学対校陸上競技大会
第35回 全国七大学対校女子陸上競技大会
令和6年7月27日(土)・28日(日)
豊橋市陸上競技場

～短距離(短短)～

男子100m

予選(3組2着+2)

1組 長田雅史(4) 4着11"09(+1.3)

2組 高田雄平(4) 2着10"65(+0.7)Q

3組 山田慎之助(4) 1着10"68(+2.1)Q

男子100m予選には長田(4)、高田(4)、山田(4)の3名が出場した。

長田はスタートからじわじわと他大に差をつけられ、粘ったものの刺すことができず、悔いの残るレースであった。

高田も実力通り手堅く2着で、山田は中盤から独走になり、余力を残しての1着となった。高田、山田が決勝へ駒を進めた。(奥村)

決勝

高田雄平(4) 1着10"60(+0.8)

山田慎之助(4) 4着10"68(+0.8)

男子100m決勝には高田(4)、山田(4)が出場した。

高田はスタートで他大に遅れを取ったものの、得意の後半で伸ばしきり、見事1位となった。怪我が多く苦しんできた高田であったが、地道な努力が実り、この大舞台での優勝という輝かしい結果を手に入れることができた。

山田は得意のスタートで飛び出したものの伸び悩み、後半で意地の走りを見せるものの着差ありで表彰台を逃すという涙をのむ結果であった。(奥村)

男子200m

予選(3組2着+2)

1組 高田雄平(4) 1着21"84(-1.2)Q

2組 中川雄稀(2) 5着22"52(-0.7)

3組 高橋昂生(3) 1着21"73(-1.0)Q

男子200m予選には高田(4)、中川(2)、高橋(3)が出場した。

高田はスタートからスムーズに加速し、後半は余裕を持って1着でゴールした。

中川は少し走りに重さがあり、後半で粘ったもののあと一歩及ばずであった。

高橋は怪我の治り具合が心配されていたが、流石の走りを見せ、1着でのゴールとなった。以上高田、高橋が決勝進出を決め、対校戦の最初の種目からチームに勢いを持たせた。両者余力を残したレースであったので、決勝に期待がかかる。(奥村)

決勝

高橋昂生(3) 1着21"22(+1.1)

高田雄平(4) 2着21"35(+1.1)

男子200m決勝には高田(4)、高橋(3)が出場した。

高田は前半はリラックスした走りをしながらカーブを抜け、後半は持ち味の大きな走りを見せてシーズンベストの21"35で2位に入った。今シーズンも順調にタイムを伸ばしており、後半シーズンにも期待が

かかる。

高橋は脚に不安を抱えながらも、スタートから低く飛び出し、そのまま後続から逃げ切り21“17の自己記録に迫るタイムで優勝した。後半で失速し、惜しくも優勝を逃した去年の雪辱を果たした。(中村)



男子200m決勝で力走を見せた高田(4)・高橋(3)

男子4×100mR

決勝

山田(4)－高田(4)－長田(4)－林(2)

1着40“92

男子4×100mR決勝には山田(4)－高田(4)－長田(4)－林(2)の走順で出走した。

山田は持ち前の加速力でスタートから飛び出し、勢いのまま高田にバトンを繋いだ。パス自体は少し詰まったものの、高田は持ち前の伸びのある走りを見せさらに他大に差をつけた。長田とのバトンパスは間隔が少し広いように思われたが無事渡り、カーブ区間をうまく走りきった。3走－4走のバトンパスでは林が少し飛び出してしまったものの、うまく調節して区間内に渡すことができた。好調の林はそのままリードを守り抜き、見事1位となった。

高橋(3)を欠き、バトンパスなどの課題が残리つつもこの結果であるので、京都大学の強さが充分に示された結果であった。(奥村)

女子100m

予選(2組3着+2)

1組 平松藍(3) 4着13“08(+1.3)q

2組 中野直子(4) 2着12“50(+2.5)Q

女子100m予選には平松(3)、中野(4)が出場した。

平松は長期的な怪我から復帰したばかりだが練習は好調。レースでは前にうまく喰らいつき、4着ではあったもののプラスでの決勝進出を決めた。

中野も怪我等で苦しんでいたものの、今大会に向けて調子を合わせてきており、力みなく2着でこちらも決勝に駒を進めた。(奥村)

決勝

中野直子(4) 3着12“46(+2.0)

平松藍(3) 8着13“15(+2.0)

女子100m決勝には平松(3)、中野(4)の両名が出場した。予選でGRやそれ相当の記録を出す選手がいるなど、大変レベルの高いレースであったが、中野は焦ることなく実力を発揮し、大幅PB更新で堂々の3位であった。

平松は、スタートから厳しい戦いとなり、結果としては8位であった。しかし、復帰明けということを考えるとまだまだ伸びしろがあり、今後に期待したい。(奥村)

女子4×100mR

決勝

平松(3)－中野(4)－平岡(4)－齋藤(3)

2着49“76

女子4×100mR決勝には平松(3)－中野(4)－平岡(4)－齋藤(3)の走順で出場した。ここまでの総合得点は阪大と並んでおり、この結果で総合順位が決まるという大変重圧のかかるレースであった。

100m決勝にも出場した1走の平松は良い飛び出しを見せ、勢いのまま2走の中野に繋いだ。

少し詰まったものの中野は他大のエースが走る中で遜色ない走りを見せた。

平岡とのバトンは少し距離があったが及第点であった。勝負強さが光る平岡は前を追いながらカーブ区間をうまく走りきり、バトンを繋いだ。

4走の齋藤は前日のOP100mでは満足の行かない走りであったが、しっかりと調子をあわせてきており、先行する阪大を必死に追った。結果としては実力及ばず2位となり、悔しさが残るものとなった。負けず嫌いなメンバー揃いであるので、これを糧にさらなる成長に期待したい。(奥村)



優勝のかかった女子4×100R

～短距離(短長)～

男子400m

予選(3組2着+2)

1組 川村拓也(2) 5着50“53

2組 益田椋多(4) 2着48“50 Q

3組 岩本翔太(4) 1着49“06 Q

男子400m予選には川村(2)、益田(4)、岩本(4)が出場した。

川村は事前のランキングをかえして決勝進出を果たすため序盤から積極的なレースを展開したが悔しさの残る結果となった。

益田は同タイムの2着争いを制しPBを更新しチームに勢いをつけた。

岩本は最後は後ろを見る余裕も見せ余力を残して1着でゴールした。

この種目とマイルで京大陸上部を支え続けてきた2名が3年連続で決勝に進出し、LSパートの強さを見せつけた。(石原)

決勝

益田椋多(4) 1着48“75

岩本翔太(4) 2着49“22

400m決勝には4回生の岩本、益田が出場した。

益田は前日の好調のまま前半から他の追従を許さず優勝した。岩本は最後の直線で2位争いが繰り広げられ競り合う形となったが勝負強さを見せ2位を死守した。

この種目で11点を獲得し男子の総合優勝へ大きく貢献した。(石原)



男子400mで優勝を果たした益田(4)

女子400m

タイムレース決勝(2組)

1組 平岡雪乃(4) DNS

2組 中野直子(4) DNS

中野(4)、平岡(4)がエントリーしているが、他種目との兼ね合いで欠場した。(岩本)

男子4×400mR

決勝

益田(4)－高田(4)－高橋(3)－岩本(4)

1着3'15"67

男子4×400mR決勝には益田(4)、高田(4)、高橋(3)、岩本(4)が出場した。

益田は、終始安定感のある走りで1番手でバトンを渡した。

高田は、100m、200mそれぞれの予決と4継を走っていたため、走りに疲労が見受けられた。東大には先行を許したものの、阪大とほぼ並びながらバトンを繋いだ。

高橋は、バトンをもらおうとすぐに阪大とのリードを広げ、さらにバックストレート中腹で東大を抜いた。その後も、東大からのリードを保ちながら、バトンを渡した。

岩本は、序盤から東大とのリードをみるみる大きくしていった。その後は、後方を確認しながら確実に1位を守り抜いた。大会記録更新とはならなかったものの、七大戦の最終種目を京大の優勝で飾った。(川瀬)



怪我をおしての出場となった高橋(3)

～ハードル～

男子110mH

予選(3組2着+2)

1組 柳町悠斗(1) 4着15"67(+3.0)

2組 五十嵐聖(4) 2着15"19(+1.3)Q

3組 杉本蓮(3) 4着16"62(+1.4)

男子110mH予選には柳町(1)、五十嵐(4)、杉本(3)が出場した。

1組の柳町はばねのあるハードリングで好位置でレースを進めたものの、後半ハードルに足をかけて失速し、4着でゴールした。

2組の五十嵐は何度かハードルに接触しながらも力強い走りを見せ、見事着順での決勝進出を決めた。

3組の杉本(3)は、抜群のスタートを見せ先頭争いをするも、中盤以降思うようにスピードに乗れず4着でゴールした。(新庄)

決勝

五十嵐聖(4) 5着15"55(+1.1)

男子110mH決勝には五十嵐(4)が出場した。絶好のスタートで前半から先頭争いに加わり、後半も粘り強く食らいつき5着でゴールした。事前のランキングを大きく返す素晴らしい走りであった。(新庄)

男子400mH

予選(3組2着+2)

1組 青柳佑(3) 1着54"82 Q

2組 柳町悠斗(1) 1着54"65 Q

3組 金盛圭悟(4) 3着55"54 q

男子400mH予選には青柳(3)、柳町(1)、金盛(4)が出場した。

1組の青柳は前半から余裕をもって先頭でレース

を進め、最後はやや流しながら危なげなく決勝進出を決めた。

2組の柳町(1)は前半から軽やかな走りを見せ、課題であった後半も失速することなく走り切り、1着で決勝進出を決めた。

3組の金盛(4)はバックストレートを余裕をもってこなし、後半の歩数調節もうまくまとめ、タイムで決勝進出を決めた。(新庄)

決勝

青柳佑(3) 1着51“99

柳町悠斗(1) 5着55“31

金盛圭悟(4) 8着56“28

男子400mH決勝には青柳(3)、柳町(1)、金盛(4)が出場した。

青柳(3)は序盤からスピードに乗って先頭に立ち、中盤以降も崩れることなく独走した。10台目のハードルでややミスがあったものの2位以下におよそ2秒差をつける圧勝であった。

柳町(1)はバックストレートで内側の青柳にとらえられたものの、冷静にレースを進め、最後の直線も粘りを見せて5着でゴールした。多種目出場で疲労のあった中で、素晴らしい走りを見せた。

金盛(4)はバックストレートでの向かい風の影響を受けスピードに乗り切れないままレースが進んだ。後半はピッチを上げて追い上げを見せたものの、前半の遅れを取り戻せず8着でゴールした。悔しい結果ではあったものの、一時期の不調からは脱しつつあり、今後の好記録に期待したい。(新庄)



全カレ標準に迫るタイムで

男子400mH優勝を果たした青柳(3)

女子100mH

タイムレース決勝(2組)

2組 平岡雪乃(4) 1着(全体1位)14“62(+1.9)

2組 新保歩(4) 3着(全体3位)15“09(+1.9)

女子110mHには平岡(4)、新保(4)が出場した。

平岡は絶好のスタートを決め、2台目以降も2位以下をぐんぐんと突き放し、大会新記録で優勝を決めた。女子主将としてもチームを勢いづける素晴らしいレースを見せた。

新保は前半から力強い走りで先頭争いを繰り広げ、後半もリズムを崩すことなく走り切り、自己新記録で3着でゴールした。ランキングを見事に返して2点を獲得した。(新庄)

～中距離～

男子800m

予選(3組2着+2)

1組 阿部陽葵(2) 4着2'00"78

2組 平山悦章(4) 3着1'57"02 q

3組 杉原一洸(3) 2着1'56"49 Q

男子800m予選には阿部(2)、平山(4)、杉原(3)が出場した。

阿部は順調なスタートを見せたものの、300m通過付近でポケットされてしまい苦しい展開に。62秒で一周目を通過し集団はペースアップ。残り200mでスパートをかけるもうまく抜け出せず、惜しくも4着でのゴールとなった。

平山は序盤から落ち着いた走りを見せ中ほどに位置取る。終始集団はまとまる中、400m通過付近で先頭へ出る。その後四番手に落ちたものの、4回生の意地を見せ3着でゴール。粘りを見せた結果、プラスで決勝に拾われた。

杉原は最後尾からのスタートとなったものの、持ち味の冷静な走りですぐに順位を上げ残り一周で先頭へ出る。途中三番手になるが、ラスト100mでスパートをかけ余力を残しながら2着でゴールした。(柴折)

決勝

杉原一洸(3) 4着1'59"79

平山悦章(4) 7着2'05"44

決勝には平山(4)、杉原(3)が出場した。

レースは東北大の選手2名が飛び出す展開に。杉原、平山は一周目から攻めた走りを見せ300m通過で3,4番手になる。その後、杉原は4番手となり、粘りの走りを見せペースを落とすことなく4着でゴール。一方の平山は後半失速し、ラスト200mで切り替えを図るもスパートをかけられず7着でゴール。難しい展開の中2人とも全力を出し切ったレースだった。結

果、京大はこのレースで3点を獲得した。(柴折)

男子1500m

決勝

西川洸平(4) 7着4'01"67

柴折心汰(2) 13着4'05"78

奥村究(3) 21着4'11"95

男子1500m決勝には西川(4)、奥村(3)、柴折(2)が出場した。

他大の1人が抜け出し2位以下は最初の400mを67秒というスローペースで展開する。京大の3選手が冷静に2位集団でレースを進める中、1000mを過ぎて集団が縦長に変化しスパート合戦が始まる。西川(4)は最後の直線まで5位争いに絡むが7位と入賞まであと一歩及ばなかった。柴折(2)、奥村(3)はスパートの出遅れを巻き返し切れず13位、21位で競技を終えた。(八木)



あと一歩及ばなかったが熱い走りを見せた西川(4)

女子 800m

決勝

小倉唯愛(3) 2着2'19"83

服部颯希(2) 7着2'26"51

女子 800m には小倉(3)、服部(2)が出場した。

小倉は順調なスタートを切り二番手についた。先頭が飛び出す中、何度も後方に追いつかれそうになるが、決死の粘りを見せ最後まで 2 番手を守り抜いた。

一方の服部はやや後方からのスタートになったものの、中盤に 2 位集団から離れる他大の選手の間を逃さず、果敢な走りで抜き去った。最後まで安定した走りを見せ、7 着でゴール。結果、京大はこのレースで 3 点を獲得した。攻めの姿勢や安定感のある走りに、今後の活躍が期待される。(柴折)

～長距離～

男子5000m

決勝

照山潤(3) 17着16'18"06

高山兼輔(4) 18着16'41"33

服部来羅(3) 20着17'02"74

30℃越えという厳しいコンディションの中で行われた男子5000mには高山(4)、照山(3)、服部(3)が出場した。

大会記録を狙う東大秋吉が序盤から大きく飛び出しハイペースでレースを進める中、京大の3選手は2位集団の中盤から後方でレースを進めた。しかし1600mあたりから集団の後方につけていた服部(3)、高山(4)が遅れ始め、集団の中盤につけていた照山(3)も2000m通過あたりから徐々に遅れ始めた。京大の3選手はその後走りを立て直すことができず苦しい走りとなった。(東條)

男子3000mSC

決勝

小野竜之介(1) 7着9'34"57

伊藤寿真(3) 17着10'28"76

小井稜真(4) DNF

3000mSCは小井(4)、伊藤(3)、小野(1)が出走した。

上位を狙う小野は、スタートから飛び出した先頭を後ろから追う展開。周りに使われる展開になり中盤苦しみ、ラストは持ち前のスピードで追い上げを見せたがわずかに及ばず悔しい7着でフィニッシュした。

伊藤は6位ラインを意識したレース展開で1000mを順調に通過するが、失速し粘りきれず17着。

小井がDNFになってしまうほど非常に陽射しが強く暑い過酷な条件下で、出場選手は暑さに苦しみながらも、次回の得点への期待を持たせた。(千代田)

女子3000m

決勝

濱口姫生(2) 3着10'26"81

高木こころ(1) 7着10'46"38

女子3000m決勝には、濱口(2)、高木(1)が出場した。

両名ともスタートから先頭集団につける積極的な走りを見せる。集団が徐々に絞られるなか、濱口は終盤まで先頭に位置し、ラストは少し先頭と差が開くも3着でゴール。ランキング外から見事得点した。

高木も中盤で先頭集団から離されてしまうが、粘りの走りを見せ7着でゴールした。七大戦2日目最初のトラック種目で2人ともガッツのある走りをし、部全体が勢いづいた。(日野谷)



ランキングを返し得点した濱口(2)

～競歩～

男子5000mW

決勝

中村颯葉(2) 1着21'33"73

土田浩生(2) 2着21'40"16

中田晴斗(1) 5着22'24"20

男子5000mWには中村(2)、土田(2)、中田(1)が出場した。

中村・土田は序盤から積極的に先頭に出て相手を揺さぶり、集団の主導権を握りながらレースを進めた。中田は冷静に先頭集団の後方で得点圏をきっちり守りながらレースを進めた。レースの中盤、中村・土田が後続を突き放すと、中村はそのまま先頭を守って危なげなくゴール。土田は一時阪大の選手に追いつかれるも、ラスト1周で再び突き離して2位でゴールした。

中田も6番手をきっちり守り抜き、ゴール後1名が失格したため繰り上がりで5位となった。3人ともきっちり仕事をしてランキングを返す13点を獲得し、チームに勢いをもたらす素晴らしいレースだった。(原)



1 回生ながら得点をもぎ取った中田(1)

～跳躍～

男子走高跳

決勝

山中駿(4) 1位2m16

田中颯真(3) 3位タイ1m95

丹野啓仁(1) DNS

男子走高跳には山中(4)と田中(3)が出場した。丹野(1)は怪我のため残念ながら欠場となった。

田中は、1m85から競技を始め、1m95までは1回目で成功させた。その後、暑さや足の状態を考慮し1m98をパスし2m01に挑むも成功とはならなかった。本人としては悔しさの残る3位タイであった。

山中は直前まで走幅跳を競技していた関係で1m90から競技を始めた。この高さをはさみ跳びでクリアすると、2m01も難なく成功させた。続く2m10は助走が上手くいかず2度失敗するも3回目に成功させ優勝を確定させると、2m16も成功した。自己ベストかつ大会新記録の2m24は惜しくも成功できなかったが、見事大会4連覇を達成した。(鴛原)

男子棒高跳

決勝

深井颯一郎(4) 3位3m80

吉富文暁(3) 2位4m00

男子棒高跳には、深井(4)、吉富(3)が出場した。資格記録の近い他校の選手らが3m40、3m60から試技を開始し着実に記録を残していく中、深井と吉富は、当日の練習跳躍の調子の良さを考え、3m80から試技を開始した。2人とも安定した実力で、1回目の跳躍で3m80をクリアし、試技回数において他校の優位に立った。4m00は、パスした東北大の島村を除き、吉富のみがクリアした。結果、吉富は記録4m00で2位、深井は記録3m80で試技回数で他大

に勝利3位となった。(紀之定)



男子棒高跳表彰式での深井(4・右)と吉富(3・左)

男子走幅跳

決勝

山中駿(4) 3位6m79(−0.5)

松本良平(4) 8位6m49(−0.4)

大住圭樹(4) NM

男子走幅跳には大住(4)松本(4)山中(4)が出場した。

大住は足首の怪我により直前に跳躍練習ができないうちでの出場になった。助走練習の動きは良く、また本番の試技においても攻めた跳躍をし、距離自体は出ていたが足が合わずNMと悔しい結果に終わった。

松本は自身の持ち味であるスピードを生かした跳躍をしたが、二本目までファールであった。しかし追い込まれた三本目で6m49をマークし、トップエイトに進むことに成功した。その後も攻めた跳躍をするも距離を伸ばせず、8位で競技終了した。

山中は高橋(3)との正補交代での出場であった。急遽決まった走幅跳であったが一本目で6m77をマークし1位。その後も6m79と記録を伸ばし5本目まで1位を守ったが、最終跳躍で抜かされてしまい3位で競技を終了した。

総じて走幅跳ではランキングを覆すために全員が攻めた試技を行っていたと思う。今回結果に繋がらなかったとしてもこの悔しさをバネに次へ挑んでほ

いい。(梶)

男子三段跳

決勝

中川遥仁(4) 4位13m99(−0.1)
田中颯真(3) 12位13m36(+0.4)
松井和輝(3) 2位14m47(−0.7)

男子三段跳には、中川(4)、田中(4)、松井(3)が出場した。

3回目までの試技では、中川がPBを更新して13m94でランキングを返して5位、松井がSBの14m47でランキング通り2位で通過した。

田中は、当日の助走の調子が悪く、踏切までにスピードを上げ切ることができず、13m36で12位となり、エイト入りを逃した。4本目以降では、暑さからの疲労で、松井は5本目をパスし試技回数を絞ったものの、記録をのばさなかった。中川は4本目でさらに13m99に記録を伸ばした。結果、松井が14m47で2位、中川が13m99で4位、田中が13m36で12位となった。主将の意地、次期主将の実力が垣間見えた。(紀之定)



主将・中川(4)の自己ベストの跳躍は
見る者の心を動かした

女子走高跳

決勝

篠田佳奈(4) DNS
新保歩(4) DNS

女子走高跳には新保(4)と篠田(4)が出場予定であった。しかし、2名とも得点ラインの他種目と時間が重なったこと、他大学の選手のレベルが高かったことおよび暑さを考慮し、欠場となった。(鴛原)

女子走幅跳

決勝

篠田佳奈(4) 4位5m07(−0.1)
新保歩(4) 9位4m69(+0.2)

女子走幅跳には新保(4)と篠田(4)が出場した。

新保(4)は一本目から安定した跳躍を見せ、疲れもあったが助走のスピードを落とすことなく跳び切った。

篠田(4)は5メートル近い跳躍でトップ8に残り、その後も記録を伸ばし続け4位に食い込んだ。両者とも多種目出場の中、点を獲得しチームに勢いをもたらした。(藤本)

～投擲～

男子砲丸投

決勝

大住圭樹(4) 8位9m77

岡本亜哲(4) 12位9m06

浦田峻太郎(1) 13位8m23

男子砲丸投には、大住(4)、岡本(4)、浦田(1)が出場した。

大住は、2投目で自己ベストを大幅に更新する力強い投げを見せ、エイトラインに残ったものの惜しくも得点を逃した。

岡本は膝の痛みを抱えながらも力強い投げで2投目に記録を伸ばしたもののエイトラインには届かなかった。

今大会が初出場となる浦田は、練習よりも記録を伸ばす堂々とした投げができており、今後の活躍に期待が持てる。3名ともランキングを返す力強い投げを見せた。(亀井)

男子円盤投

決勝

岡本亜哲(4) 5位30m78

小島伸介(1) 13位23m79

五十嵐聖(4) 17位14m78

男子円盤投には岡本(4)五十嵐(4)小島(1)が出場した。

競技時間の延長や手拍子を求める選手がいたことにより、例年以上に盛り上がった試合となった。

岡本は一投目から30m付近の記録を投げ、上位選手との勝負になった。30m付近の選手が多く、一投ごとに順位が入れ替わる激しい試合でしっかりと30mをキープし5位に入った。

五十嵐は今回からターンに取り組んだ。110mHの

後で気分が乗っており、専門外ながらもスタンドを元気づける内容のパフォーマンスを発揮した。

小島は一般規格での自身初の試合となった。1回生ということで、暑さに適応するのに苦労していた。目標にしていた25mに届かなかったことは本人も悔しいだろう。手足の長さにはポテンシャルの高さを感じるので、今後の成長に期待する。(眞鍋)

男子ハンマー投

決勝

岡本亜哲(4) 5位31m38

中尾亮介(1) 10位20m75

中川遥仁(4) 15位16m99

男子ハンマー投には岡本(4)中川(4)中尾(1)が出場した。

岡本は上位三人が30m越えを連発する中で、自分の投擲を6本揃えることができた。目標であった3位には届かなかったものの、ランキングを返す5位となった。

中川は主将として、2日目のトップバッターを務めた。前日の三段跳の勢いを持ち越して、チームを盛り上げる全力の投擲を行った。七大戦に向けて積み重ねた練習の成果を発揮し、主将として大きな役割を果たした。

中尾はハンマー投経験を活かして、思い切った投擲を繰り返した。1本目、3本目がファールとなり力を出し切れなかったものの、ハンマーに勢いを感じた。10位とトップエイトも見えていたため、来年以降のさらなる飛躍に期待したい。(眞鍋)



円盤投・ハンマー投の2種目で得点した岡本(4)
男子やり投

決勝

川村 拓也(2) 10位44m56

柳町 悠斗(1) 11位43m34

木下 賀貴(2) NM

男子やり投には、川村(2)、木下(2)、柳町(1)出場した。

川村は肩の強さを活かした投げで1投目から自己ベストを大きく更新した。

木下は3投全て右ラインから外れNMとなったものの、攻めた投げができ今後に期待が持てる。

柳町は、走力を活かした素早い助走で1投目から力強い投げを見せた。今回は惜しくも得点とはならなかったが、今後の活躍に期待したい。(亀井)

女子砲丸投

決勝

篠田佳奈(4) 1位11m48 GR

新保歩(4) 7位8m88

女子砲丸投には、篠田(4)と新保(4)が出場した。

篠田は、自身の強みである筋力を活かした安定感のある力強い投げで、大会記録を塗り替え、1位を獲得した。

新保は、毎回の投げごとに修正を加え、丁寧且つパワフルな投げで記録を伸ばしたものの、惜しくも得点には届かなかった。(亀井)



大会新で優勝した篠田(4)

女子やり投

決勝

篠田佳奈(4) 1位48m74

新保歩(4) 5位30m96

女子やり投には、篠田(4)、新保(4)が出場した。

篠田は1投目は右にそれたが、2投目に修正を加え他を寄せ付けずに記録を出し競技終了。大会4連覇を成し遂げた。

新保は、多種目での出場の中での出場であった。暑さと疲れもあり、思うような投げができなかったが一本一本修正を加えながら6投投げきった。惜しくも得点とはならなかったが、粘り強く戦い抜いた。(亀井)

④ 各種ご報告

本年の関西インカレをご観戦いただいた OB,OG の方々の名簿を以下に掲載させていただきます。

この度は暑く、遠方の会場にもかかわらずご観戦いただき誠にありがとうございます。

並びに、ご足労いただいたにもかかわらずお名前が掲載されていない方につきましては、

この場を借りてお詫び申し上げます。

鯉谷忠夫 S41
藤原忠義 S41
森本正幸 S41
爪竹爽男 S42
勝村弘也 S44
沼野正義 S47
中村茂夫 S48
池本忠司 S49
桂総一郎 S51
宮下欣二 S51
眞野勝文 S53
重村充男 S54
三好稔彦 S54
河合正純 S57
熊谷元 S59
沢田和昌 S60
櫻井研吾 H22
長谷川聡 H24
岩橋優 H25
眞武俊輔 H25
矢澤学 H25
水野廉也 R2
浅井良 R3
芦田開 R3

澤田剛 R3
中野水貴 R3
足立舜 R4
小坂みゆ海 R4
酒井良佑 R4
柴田栗佑 R4
高木穂乃香 R4
鄭晟皓 R4
仲村快太 R4
永田智季 R4
西川真悠 R4
野田真志 R4
今西直 R5
川口修大 R5
高橋惇寿 R5
松岡健 R5
山田大智 R5
岩崎光起 R6
江端康汰 R6
川添緑夏 R6
藤浦敦士 R6
森尾美月 R6
(敬称略)



蒼穹ニュース 令和6年度 第4号
令和6年 8月3日発行

発行所：京都大学体育会陸上競技部
編集者：佐向丘（蒼穹ニュース担当副務）
写真担当：濱口姫生・大西智貴・川村拓也

陸上競技部 HP	http://www.athletics.kusu.kyoto-u.ac.jp/
陸上競技部記録 HP	http://www.athletics.kusu.kyoto-u.ac.jp/kiroku.htm
関西学連 HP	http://gold.jaic.org/jaic/icaak/index.htm
メールアドレス	sakoh.kyu.56n@st.kyoto-u.ac.jp（佐向）